

日本語教員養成課程を受講して

117J033 崎 田 大 地

私が日本語教育の世界を目指そうと思ったきっかけは『日本人の知らない日本語』（メディアファクトリー）という本でした。日本語教員が仕事の中で外国人と触れ合う日常を描いたこの本を母が買ってきてくれたとき、何となく読み始めていくうちに普段あまり関わることのない外国人と日本人とのエピソードに興味を持っていました。

映画で日本語を覚えたのでやくざ言葉を使ってしまうフランス人、入学したての頃は単語しか喋れなかったのに今では日本人より敬語が上手いイギリス人など、読み進めていくうちに「自分も外国人と関わってみたい」と思うようになりました。またその本を通じて、自分の知らなかった日本語にも出会いました。たとえば、「がんばってください」の丁寧な言い方として「お疲れの出ませんように」という言い方がそれで、面白い言い方だと思って自分でも先生方に使いまくってみたりしました。

ももとは普通の国語科の教員として働くのを目標としていた私でしたが、自分も美しい日本語が使えるようになりたい、外国人の方と関わってみたいと考えるようになって、大学受験の時には自然と日本語教員養成課程のある大学を探し、聖学院大学に入学することになりました。

2年の終わりまで日本語教育養成課程の授業を受けてみて考えたのは、ひとまとめに「日本語教育」といっても様々な教え方があること、学生さんの出身国や年齢や学力によってそれを使い分けることが重要なのだということです。

例えば「TPR」（トータルフィジカルレスポンス）という教授法では、目的の語句だけで（日本語だけで）指示を行い、指示に対して学生は実際に体を動かして反応します。

言葉で書くと難しそうですが、これは私たちが母国語を覚えるプロセスと同じで、椅子をそばに置くなどして「座ってください」、「立ってください」と繰り返して学生に推理させ、行動で覚えてもらう、という流れになります。

この教授法であれば、子どもはもちろん、年齢や国籍に関係なく学ぶことができます。私も実際に授業中にフランス語で TPR を体験しましたが、ただ教科書を眺めて勉強するよりも楽しく、にぎやかに勉強することができ、体で覚えるので記憶に残りやすいように思いました。

ただこの教授法も万能ではなく、熟語などの難しい語句、「インフレ」や「年功序列」といった抽象的な概念は伝えることが難しくなります。これらを学ぶ必要のある学生には、また別の教授法を使う必要があるということです。

ただ漠然と「日本語教員になりたい」と思っていた私も、このような実践的な知識を学ぶうちに少しずつ卒業や就職への意識が固まっていったように感じました。

日本語教員養成課程には、選択必修として直接日本語教育に関わらない科目もあります。

「日本文学概説」や「異文化間コミュニケーション」などがそうです。

これらの科目は多数の中から選ぶことになりますが、普段私たちが気に留めない日本の文化を見つめなおしたり、日本文学や古典について学べるものが多いです。

例えば「日本文学概説」では源氏物語を始めとした日本文学を読み、その内容を深く掘り下げていきます。自分だけでは読みにくいこれらの物語も、ヤマトタケルや光源氏たちの心情や時代背景など詳しく解説してくださるので、とても楽しく学ぶことができます。

また、ただ読み進めるだけではなく、授業の終わりには疑問点や考察等を感想シートに記入することが求められるので、日本文学について自発的に考える良い機会になります。

日本語教員養成課程の授業を受けていると、自然と留学生との関わりも増えていきます。この大学は留学生が多いので、授業で会うこともあると思いますが、ちょうど私が履習した年のこの課程の授業では半分ほどが留学生でした。日本人より留学生と会うことの方が多くなったかもしれません。

その中で一人の中国人の友人ができました。彼とは、日本語教員養成課程

の授業を一緒にとることや、一緒に帰ることも多くなりました。授業内や帰宅中に雑談をしていると、ふとした時に互いの国の違いに気付くことがあります。言葉の違いや文化・慣習等の「大きな文化」については授業やテレビで耳にする機会もありますが、その国のマイナーな料理や物価や流行りのゲーム等の「小さな文化」について学べる機会はそうそうないかと思います。

「中国で運転免許をとろうとすると、値段は日本の半分ほどだけど、期間は倍かかる。日本の免許は海外でも使えるけど、中国のは使えない。指導員とも仲良くしなきゃいけない」などということはなかなか聞けないのではないのでしょうか。こういった留学生との交流が在学中にできることも、この課程の大きな魅力であると思っています。

最後に、これから日本語教員養成課程を受けようと思っている皆さんへ言いたいことは、とにかく留学生の方との交流を持つべきだということです。

上に述べたようにその交流は単純に楽しいものであるし、勉強になります。

ただそれ以上に、自分がこの課程を進むにあたって、同じ目的を持った仲間がいるというのはとてもいいモチベーションになります。それが、海を渡って来るほど志が強い人ならなおさらです。特に、中学・高校で学ぶことの無かった分野を学ぶにあたっては、その存在が、支えてくれる友人としても、異なる視点を持つ先生としても大きな力を持ちました。

文化の違う友人に声をかけるのは最初とても勇気がいりますが、その見返りは大学4年間に限らないものだと思信しています。

私も、これから一つ一つの授業を大切に学んでいきたいと思っています。

共に目指す仲間が増えてくれるのを楽しみに待っています。

(2019年1月)